

H29・8・8

第1号

通巻141号

# 学院通信

発行  
金光学院  
719-0111  
岡山県浅口市  
金光町大谷1486  
TEL (0865) 42-3115  
FAX (0865) 42-3114

平和学習 (原爆ドーム)



## 「驚いてはならぬ」

金光学院院長 堀尾 光俊



先日、定期健診に行かせていただいた。

早朝より絶飲食で病院へ向かい、いよいよ検査開始。

まず尿の採取、次に血圧測定、さらに聴覚検査、血液採取とつづき、次に身長・体重・体脂肪を測るとのこと。「靴と靴下を脱いで下さい」と言われ、靴を脱いで脇にあった椅子に腰を下ろし、靴下を脱ごうと手をかけた瞬間、今脱いだ靴になぜか目が留まった。左右の靴の模様が違うのに気付いた。

なんとあろう事か、左の靴の中に長さ十四センチ程もあるムカデが入っていた。あわてて靴をふるって外に出した。看護師さんと二人で「きゃあー」。

私がここまで踏んで歩き回っていたため、すでにムカデは圧死状態であった。どうやら自宅の玄関で、すでに入っていたようである。

ムカデには気の毒なことをしたが、看護師さんに「さされなくて良かったですねえ」と言われ、はっと我に返り改めてその事にお礼を申し上げた。

さて教祖様は、「信心する者は驚いてはならぬ。これから後、どのような大きな事ができてきても、少しも驚くことはならぬぞ」とみ教えくださった。

私は信心する者には、入らないのであろうか、大層驚いた。おかげで次の検査が心電図だったが、針は大きく乱れに乱れた。「驚いてはならぬ」とは、「どのような難儀や問題に出会っても、

その事に徒にうろたえたり、囚われたりしてはならぬぞ。心静かに神に心を向けて、祈ることを忘れるなよ」ということではなからうか、私はそのようにいただいている。

それにしても、学院長四年目の前期前半も終えようとしている今日、よくぞここまで来させていただいたことと、お役の御用もさることながら、単身自炊生活のことを思えば、正に驚きの連続である。これこそ、おかげ以外の何ものでもない。健診の結果も若干メタボぎみとのことだが、他は異常なしの結果をいただいた。これまた心からお礼を申させていただき、そしてここからも元気に御用にお使いいただきたいと願う、今日この頃である。

ありがとうございます。

# 学院修行について

学院次長 坂口 光正

五月十五日の入学以来、保証教会長、教会家族、信者さんたちをはじめとする全教の篤いお祈り添えをいただき、男子十二名、女子十一名、合わせて二十三名の本科生全員が、前期前半の修行課程を無事終えたことは、まことにありがたいことと思わせていただきます。

今年の学院生の特徴は、とにかく全員若い、ということ。昭和生まれが四人、後は全員平成生まれで、最年長者が



覚筆写

三十四才(入学時)ということ。隔世の感がいたしております。

学院は、明治二十七年の神道金光教会学園所設立以来、百二十四年の間、教師養成のことを進めております。

お道の教師は、人々が現実生きていく時代にあって、時代の趨勢を見極めつつ、時代に流されない、本教独自の信仰伝統に根差したものの見方、考え方を身につけることが願われます。

学院修行の大切な要素に、「不自由を」ということがあります。

学院に、携帯電話、スマートフォン、ゲーム機等の通信機能の付いた機器の持ち込みを一切認めていないのも、レポート類の提出物を原則手書きとしているのも、文明の利器を否定しているのではなく、炊事、洒掃をはじめとした日常生活を、信心修行として受け止めるためにも、自分の体を動かして体認する「行」としての生活を大切に、天地自然のお働きを直接体で感じつつ神様と共に生きる生活を求めているのだと願っています。

信行輔導期間



図書館見学

あります。僅か一年ではありますが、時代を超えた視点を持つためにも、世俗の価値観から一歩距離を置く生活を求めています。昭和三十二年に「祈願」が制定されて以来、八十一年に亘って唱え続けられてきた「終生道の御用に立たしめ給わん」との願いに添い奉る学院生活を、ここからも共に進めて参りたいと思います。

## 一日の信行内容

(時間)	(信行内容)
5:20	起床
5:40	参拝出発
6:00	本部広前御祈念・洒掃
7:30	朝食
8:30	朝前の課業
9:00	洒掃
11:50	昼後の課業
12:30	洒掃
13:30	午後の課業
15:20	参拝出発
15:40	本部広前御祈念・洒掃
16:40	お退けお見送り・洒掃
18:00	夕食
19:00	夜御祈念
	自修・入浴
21:00	閉門
22:00	消灯

## 人事関係

- ・書記安武木綿子、細川展信、十二月一日付で助手に任命。
- ・助手細川展信、四月十五日付で辞任。
- ・事務長神田美智雄、五月七日付で教団会事務局へ異動。
- ・教団職員森本祐二、五月七日付で事務長に任命(教団会事務局より異動)。

## 講義科目・担当者

教会・布教科目	教団科目	教団・教義科目	信修科目
結果取次 直信・先覚 教会活動(各種活動) 礼典(祭式) 礼典(祭詞)	教団史 教団活動	教制 教義	本教概説
高橋 寛志 眞田奈保子 安部 美雄 堀江 芳則 田中 照彦	利光 康二 三好 光一 加藤 実	坂口 光正 佐藤 光貴	堀尾 光俊

# 「い」まの「ま」

## ■ 信行輔導期間

学院では、学院生活の基本日課を習得し、ここからの修行の指針を見出すために十日間の信行輔導期間を設置している。前年度の卒業生であるOBから、奉仕・待命・炊事・洒掃を中心とした生活全般の指導を受けた。本年度の本科生二十三名は、慣れない黒衣に身を包み、OBの言動に意識を集中させ、修行生としての在り方を学んだ。OBの行き届いた指導により、十一月の学院修行の基礎が出来上がり、新年度が開始された。



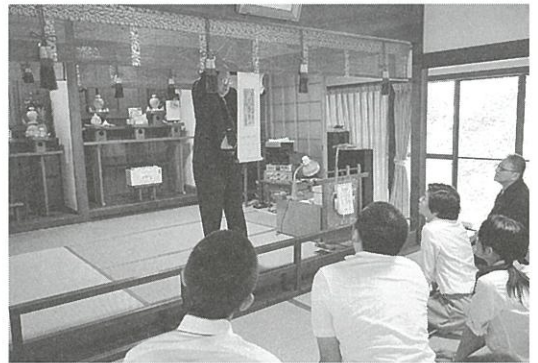
食堂棟での指導

本年度のOBは以下の通り。(敬称略)

- 坂浦 優輝 (大阪・高師之浜)
- 吉木 昭信 (福岡・福岡)
- 津田 広平 (兵庫・神崎)
- 千種せつ美 (福岡・二日市)
- 木村 仁美 (広島・呉)
- 白神 ナナ (大阪・堺)

## ■ 聖蹟巡拝

聖蹟巡拝は、教祖様ゆかりの地を訪れ、教祖事蹟への理解を深めることを願いとして実施している。六月十九日は、本科生・特科生合同で教祖様ご生家方面に赴いた。往路は、早馬神社、荒神社、西側の墓地(金光家遠祖歴世親族家族之奥城)などを巡ってご生家まで歩き、ご当主・香取航師から、香取家、教祖様やとせ様にまつわるお話を伺い、教祖様直筆の神名書付、天地書附、とせ様の婚礼衣装など貴重な品々を拝見した。また、教祖様実父である十平様が幼少の教祖様を背負って参ったとされる泉勝院に参拝し、ご住職のご修行時代のことなどのお話を拝聴した。その後、占見村の氏神の大宮神社まで山道を歩き、拜殿で揃って昼食をいただき、帰院した。七月三日には、本科生が五グループに分かれて、木綿崎山周辺を巡り、教祖奥城、立教聖場、歴代教主奥城、小野邸跡などの聖蹟を辿つ



教祖様ご生家



泉勝院

## ■ 広島平和集会

七月二十二日、平和学習として、広島平和記念公園を訪れた。

午前中は、原爆ドームや原爆供養塔、公園内の慰霊碑等を巡拝し、この日に向けて学院生が祈りを込めた千羽鶴を、原爆の子の像へお供えした。その後、語り部・篠田恵氏による被爆体験談を拝聴し、平和記念資料館を見学した。

七十二年前に原爆が投下された広島で、戦争を体験された方の生の声や、当時の様相を物語る資料に触れ、人間が起こした戦争の悲惨さ、犠牲となった命について、思いを巡らせることができたようである。

午後からは、金光教広島平和集会(原爆慰霊碑参拜式・被爆のどん底から・原爆死没者慰霊祭・合唱)に参加した。慰霊祭には、ご霊地から持参した水をお供えし、合唱では、学院生全員で奉仕して、慰霊と平和への祈りを捧げた。

この日の体験が、ここからの学院修行や御用の上に、世界の平和と人類の助けに向けた祈りや取り組みとしてつながっていくことを願う。

この他、今秋には西大寺観音院、吉備津神社、鞆津祇園宮等に参拝する予定がある。





# 特科生 卒業



今年度の特科生四名(男子二名、女子二名)は、六月十五日に入学し、七月十五日までの一カ月間に及ぶ学院修行を進めた。

学行では、教典ゼミ・祭式・祭詞などを受講し、信行では本科生の班に加って、参拝、洒掃、炊事等を行じた。またそれぞれが願いを立て、ご霊地での自主信行に取り組んだ。その中で、それぞれが教師としての基礎的素養を習得し、ここから御用に立たせていただく心構えができたようである。

また、先に入学をした本科生と互いに磨き合うことができたことは、大変ありがたいことである。ここからの御用成就を祈念する。

## 学院生活を振り返って思うこと



佐賀県・有浦教会  
寺井 徳雄

教主金光様のお祈りの中で、無事に一カ月の修行を終えることが出来まして、誠にありがたいことであります。

学院長を始め、職員の先生方には大変お世話になり、ありがとうございました。入学当初は、何も分からず、非日常の世界に入り、とまどいと不安と一杯でありましたが、本科生が優しく教えて下さり、不自由の中での「行」を乗り切ることが出来ました。

教導の時間で、那覇教会の林祝子先生による「沖縄布教五十年の歩み」の話が印象に残っています。金光様、親先生のご比礼と信心辛抱により、お道が広がっていったことから、どこまで「神任せ」に出来るかが大事であるかと考えさせら



卒業証書授与式

れました。

私の亡くなった母も、単身で布教に出ており、親先生から「石の上にも三年ということがある。三年、三年また三年と辛抱せよ」とみ教え下さっていたと聞いております。

私も、これからが本当の修行の始まりです。信念と覚悟をもって、信心のけいこをさせていただきたいと思えます。

## 祈りの中で



山口県・岩国教会  
村岡 真由美

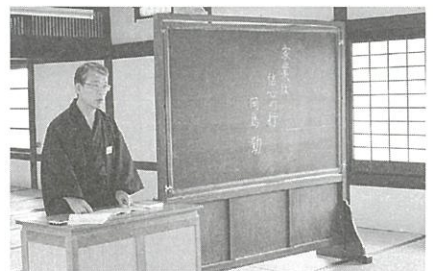
学院の修行の中で私が一番苦労したのは、慣れない下駄での歩行でした。毎日、学院と本部広前を三往復するうちに、甲の部分は傷だらけ、足の裏には水ぶくれまで出来、歩く事が苦痛になっていきました。本科生の優しい気遣いに励まされ、気持ち切り替えていましたが、外側が極端にすり減った下駄は私を思うように歩かせてはくれませんでした。とうとう体力も気力も尽き、何故こんな事をしていいのかと思うようになりました。本部広前の朝御祈念後、辛く苦しい気持ちを金光様に御取次いただくと「神様に心向けなさい。世話にならないと何も出来

ない身です」と教えて下さいました。しかし、頭では分かっていても

足の痛みが引かないことから、やり場のない気持ちを下駄にぶつけながら学院に戻りました。

その後、職員の先生がかけて下さった何気ない言葉が、私の心を柔らかくして下さい、学院長先生が私達を我が子のように見守り、いつも祈念して下さいるお姿から、親の子供を思う思いの深さに気付かせていただきました。

金光様の御取次の事を改めていただき直す中で、申し訳なさりとありがたさで涙が止まりませんでした。私は本当に痛い足しか見えていませんでした。下駄を通して、無力な自分と、多くの物や人のお世話になっている事に気付かずいた自分に気付かされました。そして何よりも親の深い愛と祈りの中に身を置かせていただいている事に深く感謝し、これからは親神様に安心していただける信心を進めさせていただこうと思えます。



教話実習

# 学院生の声



## 約三カ月過ぎた今

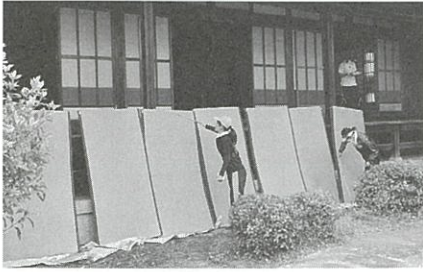


大阪府・阿倍野教会  
伊藤 貴史

日が経つのは早いもので、学院生活が始まって約三カ月が過ぎました。はじめの十日間は、作法や洒掃方法など様々なことを覚えなければならず皆必死でしたが、今では余裕が出てきて各々楽しそうにしています。しかし中には、壁にぶつかりもがいている人もいます。

そういう私も、もがいている一人なの

かもしれないかもしれません。私は金光教に縁が無い家で育ち、教会の娘さんと結婚して金光教に入信しました。学院入



畳上げ

学までの約一年間、在籍教会で修行生として過ごしてきましたが、「神様とは? おかげとは? めぐりとは?」と、理解しきれないこともあって、今なお疑問を色々んな人に投げかける日々が続いています。

学院生はそれぞれ、前期の修行目標である「神に心を向ける」とはどういうことなのかを追い求め、自らが決めた課題に取り組み、日々の修行に励んでいます。互いに尊重し合い、祈り合い、日々の改まりに努め、残りの期間も精一杯真心を育んでいきたいと思っています。

## 学院生活を振り返って



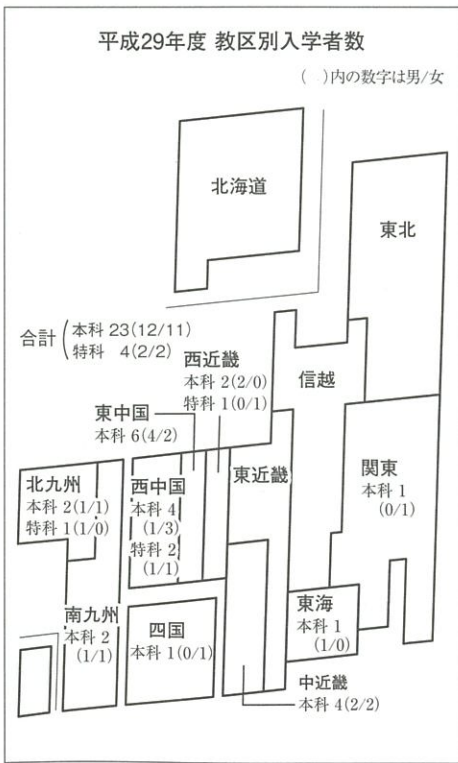
宮崎県・西郷教会  
塚本 明子

入学して早三カ月。沢山の方のお祈りをいただいて、本当に充実した毎日をごさせてください。その中で、ありがたいなと思わせていただいている事が三つあります。一つ目は、学院生ならではの御用をさせていただける事です。御本部での御祈念の先唱役、調饌、補助賛者の御用等、どれも新鮮で、教師の卵である私達をこの様に使ってください。二つ目は、どれだけの願いと祈りが込められての事だろうか、もったいない

思いがします。二つ目は、「信心のけいこ」の時間をたっぷりいただいている事です。前期の修行目標である「神に心を向ける」は、抽象的で、具体的な取り組みも決め難いものですが、朝礼や授業、日々の何気ない一コマを通じて、少しずつ分かってきた気がしております。三つ目は、同期の存在です。何かあるとすぐ「御祈念してみよう」と声をかけ合い、相談し合う中で「私達お互いのお結界やね」と、例えその言葉の後に(笑)が付いているとしても、そういう言葉を言い合えるのは学院ならではの自信です。いつでもどこでも信心について語れる仲間が常に側にいるなんて、後にも先にもこの一年だけだと思いますし、二十三通りの時節をいただいで集まった仲間なんだと思うと、本当にありがたく思わせていただきます。

「もう三カ月」 「まだ三カ月」 :とらえ方はそれぞれだと思いますが、日々を大切に過ごさせ

ていただいで、前期後半も神に心を向け、信心のけいこをさせていただきたいと思っています。



自主企画 (バレーボール)



境内芝植え